

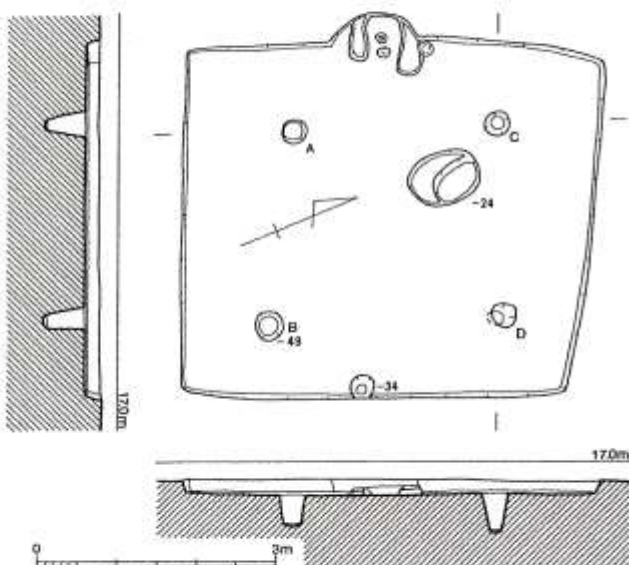
こふんじだい しゅうらく  
古墳時代の集落

広川町では、<sup>のうらせいびじぎょう</sup>農地整備事業に伴って平野部に存在した集落跡の発掘調査が進展しました。八女丘陵北側にあたる広川により開析された<sup>かがんだんきゅうじょう</sup>河岸段丘上では、古墳時代後期（6世紀後半頃）に集落繁栄の画期があるようです。

古墳時代の集落の基礎単位は「家族」です。6～7人からなる家族が住む堅穴住居は、隅丸方形4本柱構造（1辺5～6m）が一般的で、壁ぎわに造り付けのカマドが設置され、ここで煮炊きが行われていました。食事・寝起きを共にしたひとつの世帯が複数集まり、ムラ（30～90人）を形成したと思われます。

町内の一條区や太田区では、「<sup>もりぞの</sup>森園遺跡」・「<sup>きた まえ</sup>北の前遺跡」・「<sup>わりこだ</sup>割子田遺跡」等の古墳時代集落跡が多く発見されています。これら集落の堅穴住居跡からは、<sup>はじき</sup>土師器（弥生時代以来の伝統をひく<sup>さんかえんしょうせい</sup>酸化焰焼成による軟質土器）や<sup>すえき</sup>須恵器（ロクロで成形し、<sup>のぼりがま</sup>登り窯で還元焰焼成された堅く焼き締まった焼き物）が出土しています。

日常使用される土師器には、煮炊きや物を盛る器として甕・甑・高坏・杯・碗・鉢・コップ形土器等様々な種類があります。広川町出土の土師器には器面に赤塗りや黒塗り、そして<sup>けしょうど</sup>化粧土を施したものがあり、地域色や用途性を出しています。



北の前遺跡 V区24号堅穴住居跡



赤塗り・黒塗りの土器の例